

はしがき

本書は、筆者が立教大学法学部において開講している「行政学1・2」（各2単位）の講義ノートに大幅に加筆・修正を加えたものである。

本書の目的は、主たる読者として想定している学部学生のみなさんから、日本の行政に関する現象を自ら分析しようとする意欲を引き出すことにある。大学の講義を通じて伝えることができる内容には限界がある。そうであるならば、日本の行政に関する知識を網羅的に取り上げるのではなく、学生のみなさんが進んで行政学の発展的学習に取り組むきっかけを与えたいというのが本書執筆の動機である。フランスの思想家モンテスキューが『法の精神』において述べているように、読者になすべきことを残さないほど主題を論じ尽くす必要はない。肝要なことは、読んでもらうことではなく考えてもらうことである。

日本の多くの法学部のカリキュラムでは行政学は選択科目として位置づけられており、学生のみなさんの多くは主要法律科目を受講する合間に行政学を受講しているはずである。そのため、行政学を講義する教員としては、空き時間に受講することになった学生のみなさんに、まずは行政に関心を持ってもらい、その上で筆者が設定した行政に関する問いに共感してもらい、さらにはその問いに答えようという気持ちになってもらうことが重要となる。

筆者による行政学の講義では、2週間にわたって1つの行政現象を論じている。第1週目では日本の行政現象に関する問いを提示するまでにとどめ、問いに対する答えについては第2週目の講義に譲っている。問いの提示から答えまでの間に1週間を空けることにより、失礼な表現をお許しいただくならば学生のみなさんの知的フラストレーションを高めようと試みているのである。学生のみなさんは、第1週目の講義を聴いた後には、帰宅する電車の中であるいはサークル活動やアルバイトの最中に筆者が提示した問いを思い出し、あれこれ考えを巡らせるらしい。学生による授業評価アンケートによれば、家族でニュース番組をみているときに筆者が示した問いを話題にする学生もいるようである。そのため、第2週目の講義では、学生のみなさんはNHKの連続テレ

ビ小説の続きをみるように講義を聴いてくれる。本書を手にとってくれた学生のみなさんも、本書の各章における「**1** どうなっているか？」の部分を読んだ後は、すぐさま「**2** なぜそうなのか？」に読み進むことなく、一度立ち止まって自分なりに推論してほしい。

さて、筆者の大学総長室勤めは2016年4月で7年目に入った。ウィークデイは朝から晩まで学内会議に追われている。週末には全国で開催される保護者向けの教育懇談会や同窓会に総長代理として出席することも多い。また、霞が関や地方自治体での審議会・研究会等は、行政の政策決定過程を見聞できる貴重な機会であり、できるかぎり出席するようにしている。となると、比較的自由になる時間帯は帰宅後だけとなり、本書の大半は居間のテーブルで書かれることになった。

大学行政についてあれこれ思い悩むことなく帰宅後に研究に没頭できたのは、立教大学の職員の方々が頼りない筆者を懸命に支えてくださったからである。教学改革は学内の誰かの不満を必ず増幅させる。任怨分諂にんえんぶんほうと自らに言い聞かせて業務にあたってきたが、何度も挫けそうになった。そうしたときにかけてくださった励ましの言葉に、筆者は何度救われたであろうか。お名前を挙げることは差し控えるが、ここに記して深甚の謝意を表したい。

また、本書の執筆中、筆者にとって幸いだったのは、中学受験を控えた娘が居間のテーブルで筆者と一緒に勉強してくれたことである。時には鶴亀算や化学反応の解説を求められ、答えに窮することもしばしばであったが、リラックスした気持ちで本書の執筆に向き合うことができた。この場を借りて勉強仲間の娘に感謝したい。

本書の草稿段階では、中央大学兼任講師の小林大祐君、大阪大学大学院法学研究科の小林悠太君、立教大学大学院法学研究科の村上浩一君および北海道大学大学院法学研究科の山田健君から貴重なコメントを頂戴した。本書が草稿段階と比べて読みやすくなっているとすれば、それは彼らのお陰である。

法律文化社編集部の上田哲平氏から教科書出版のお話をいただいたのは2014年の春であった。上田氏は、単著の教科書を書きたい、問いを中心とした教科書にしたい、しかし多忙ゆえに完成までにはしばらく時間がかかるが許してほ

しい、といった筆者のわがまをすべて受け入れ、本書の完成を長い目で見守ってくださった。心より御礼申し上げたい。

本書は、これまで筆者の拙い行政学の講義につきあってくれたすべての受講生と、筆者を行政研究に導いてくださった恩師である手島孝先生に捧げられる。